



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2014.12.1 発行 NO.33

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

論点1 一本の線から、美しさと奥行きのある世界へ

■一本の線

私たちの保育園では、毎年、夏まつりで、5歳児クラスの子どもたちが「おみこし」づくりをしています。これまで、さまざまなテーマでおみこしがつくられてきましたが、2014年のおみこしのテーマは「かえるおみこし」。というのも、私たちの園のアトリエに2匹のヒキガエル（「けろちゃん」と「ごとおべえさん」）が住んでおり、子どもたちにとって園で一緒に生活している「なかま」のような存在となっています。

そんな2匹の「なかま」のことを、「ごとおべえさんやけろちゃんなどをみんなでつくって、みんなでわっしょいをしているところを、いきものたちやかぞくにみてもらって、よろこんだり、たのしんだりしてほしい！」という子どもたちの思いから、「かえる（けろちゃん）おみこし」づくりが始まりました。

「（素材は）何でつくろうか？」（保育者）「だんぼーるでつくりたい」（子どもたち）という意見が多かったため、まずは段ボールで「けろちゃん」の身体をつくり始めましたが…。本物の「けろちゃん」と段ボールを見比べると、子どもたちは、「けろちゃんの身体は丸い」ということに気づきました。そこでまずは、段ボールの角を切り落として、上から見て「丸い」形になるようにしました。でも、この段ボールを横から見てみると、「なんか、『しかく』（四角）にみえる…」「はこ（箱）みたいだね…」と子どもたち…。

さらにもう一度、本物の「けろちゃん」を見てみると、「からだがかうやって、ナナメになってる！」。新たな発見です。そこで、横から見ると「しかくい」段ボールをナナメに切るために、本物の「けろちゃん」と見比べながら、何人かの子どもたちが一人ずつナナメに切る線を段ボールに書いていきました。「もう少し、下じゃない？」「もっと丸いよ」など、他の子どもたちの声も聞きながら、横から見た段ボールに「け

ろちゃんおみこし」の身体の線が何本も引かれました。そして最終的に、子どもたちがその中から「これ！」という一本の線を決め、「けろちゃんおみこし」の身体の線が完成したのです。

この後、「身体の右側と左側の形は違っていてもいいの」「前足と後足はどこからどのように（どんな角度で）出ているの」「前足の指は何本か」「指の長さは全部同じなのか」「身体の色は何色なのか」「身体の『ぶつぶつ』は何色か」など、一つひとつ本物の「けろちゃん」と見比べながらつくり上げていきました。

■『美しさ』との出会い

この「けろちゃんおみこし」づくりの物語の中で私が注目したことは、子どもたちが、「けろちゃんおみこし」をつくるために身体の線を何本も引き、その中から一本を選びとっておみこしの身体のナナメの線、身体の形がつくり出されたことです。私は、子どもたちの「こだわり」はすごい、という一言で片づけてはいけなような「子どものもつさまざまな力」に驚き、そして、その力の根幹にあるものに気づかされました。

本物と同じ「けろちゃん」がつくりたい、そのためにどうしたらよいか、対象をよく見る観察力。そこには、毎日見ているからこそ、本物と私たちがつくるけろちゃんがまったく違うことが許せない、毎日ともにすごしている「なかま」だからこそ、適当につくることはできない、そういう子どもたちの執念すら感じます。ただ一本の線でも、線の中に子どもたちの発見、観察、葛藤、試行、挑戦、選択、判断、決定…多くの力が込められた「身体の本一の線」なのです。

さらに私は、こうして生み出された「おみこし」の身体の線をとて『美しく』感じました。それは、クラスのみんなで、「けろちゃん」をよく見て、話し合って描いた線だったから？本物そっくりにおみこしをつ



よく見て…



「けろちゃんおみこし」の完成！

くることができたから？そうではなく、けろちゃんのもつ『美しさ』に子どもたちが出会い、その美しさを、子どもたち一人ひとりが表現者として「どうしたら表現できるのか」と探究し、挑戦した姿。「一本の線」の根幹には、子どもたちの、もしかしたら人としての、美しさに対する真摯な姿があると思います。それゆえに、完成したおみこしを見るまわりの人々まで、『美しさ』を感じるのではないのでしょうか。

■生きていく中での『美しさ』と『奥行きのある世界』

私の試論ですが、この子どもたちの『美しさ』への真摯な姿は、これまでNEWS LETTERで取りあげられてきた二つのことにつながってくるのではないかと考えます。一つは、イタリア、レッジョ・エミリア市で行われている乳幼児教育のことです。ここでその内容を詳しく説明（紹介）することはできませんが、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育が日本の中で誤解されていることの一つとして、佐伯胖氏はその著書

『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために（増補改訂版）』（東京大学出版会、2014年）の中で、次のように述べています。

「『レッジョ・エミリア』という多くの人たちは、幼い子どもたちがすごい『芸術作品』を作り上げることで有名な保育のことだと考えてしまうかもしれない。（中略）しかも、レッジョ・エミリアではすべての幼児学校にアトリエリスタという美術系の専門員が幼児教育に参加しているのだと聞くと、レッジョ・エミリア保育といえば『幼児にアート活動をさせる保育』のことだという短絡的な見方をしてしまうかもしれない。これははっきりいって、誤解である」（同書、198頁）

レッジョ・エミリア市の乳幼児教育の根幹には、「アート」があることは間違いありませんが、それは単に「芸術作品を作り上げる」ための「アート」ではありません。本研究機構企画委員会委員でもある森真理先生は、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育について話す中で、レッジョ・エミリアにおける「アート」とは、「生き方」であり「審美性」であり、「よりよくなる（こと）」といわれています。私が感じたこと＝子どもたちがけろちゃんの『美しさ』に出会い、その美しさを表現することへの探究と挑戦は、「けろちゃんおみこし」がよりよくなることを通して表れてくる、子どもたちの「美しさ」への真摯な姿、まさしく「生き方」としての「アート」だと考えられるのです。

二つ目に、NEWS LETTER No.31において、久保健太先生は、第2の教育観として「教育とは、奥行きのある世界と子どもとの出会いを演出する営みであって、そうして、子どもが世界から自分なりの意味を引き出し、意味を与えていくことを介添えする営みである」と述べられています。もしかしたら、子どもたちが毎日同じ空間の中で一緒に生活している「なかま」として「けろちゃん」とかかわってきた中で、けろちゃんのもつ『美しさ』、それこそ、「けろちゃん」を『奥行きのある世界（存在）』として出会い、その出会いを「けろちゃんおみこし」の身体の線という形で意味を与えたといえるのではないかと考えています。『美しさ』と『奥行きのある世界』は、ともに分かちがたいかわりの中にあると思うのです。

■おわりに

子どもたちが「けろちゃんおみこし」をつくる過程

で導き出した「一本の線」。そこから、『美しさ』と『奥行きのある世界』について考え始めた時に、一編の詩に出会いました。それを最後に紹介します。

世界はうつくしいと
うつくしいものの話をしよう。
いつからだろう。ふと気がつくと、
うつくしいということばを、ためらわず
口にするのを、誰もしなくなった。
そうしてわたしたちの会話は貧しくなった。
うつくしいものをうつくしいと言おう。
風の匂いはうつくしいと。溪谷の
石を伝ってゆく流れはうつくしいと。
午後の草に落ちている雲の影はうつくしいと。
遠くの低い山並みの静けさはうつくしいと。
きらめく川辺の光はうつくしいと。
おおきな樹のある街の通りはうつくしいと。
行き交いの、なにげない挨拶はうつくしいと。

雨の日の、家々の屋根の色はうつくしいと。
太い枝を空いっぱいひろげる
晩秋の古寺の、大銀杏はうつくしいと。
冬がくるまえの、曇りの日の、
南天の、小さな朱い実はうつくしいと。
コムラサキの、実のむらさきはうつくしいと。
過ぎてゆく季節はうつくしいと。
さらりと老いてゆく人の姿はうつくしいと。
一体、ニュースとよばれる日々の破片が、
わたしたちの歴史と言うようなものだろうか。
あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ。
うつくしいものをうつくしいと言おう。
幼い猫とあそぶ一刻はうつくしいと。
シュロの枝を燃やして、灰にして、撒く。
何ひとつ永遠なんてなく、いつか
すべて塵にかえるのだから、世界はうつくしいと。
長田弘『世界はうつくしいと』（みすず書房、2009年）
（井出孝太郎●静岡・えじり保育園園長）

論点2 「引き込まれる体験」と「つくり込む執念」

◆込む

井出先生の文章を読むと、「けろちゃんおみこし」をつくろうとして、けろちゃんを見ながら何本もの線を段ボールに書き込んでいる子どもたちの姿が目には浮かんできます。その姿は、井出先生が「執念」「挑戦」「真摯な気持ち（姿）」という言葉で表現しているように、ある種の切迫感をも感じさせるような姿です。

井出先生は、私の言葉を引いて、けろちゃんと子どもたちとのかかわりが「奥行きのある世界と子どもとの出会い」だと述べています。それは非常にありがたいのですが、その一方で私が感じたのは、子どもたちがけろちゃんに向き合っている時の切迫感を表現するのに、「出会い」というのんきな言葉で表現しては、何だか子どもたちに申し訳ないという気持ちです。

「出会い」という言葉に変えて、「込む」という言葉を使ったほうが、奥行きのある世界と子どもとのかかわりを適切に表現できるように思います。つまり、子どもたちは奥行きのある世界に出会うというよりも、奥行きのある世界に引き込まれ、飲み込まれ、入り込んでしまうのです。

この「引き込まれ、飲み込まれ、入り込んでしまう体験」は、気がついたら、いつの間にか起こっています。「今から奥行きのある世界に引き込まれよう！」と思って、思い通りに引き込まれることはまずありません。長田さんの詩にあるような情景、例えば「午後の草に落ちている雲の影」を何の気なしにながめているうちに、気がついたら、いつの間にか我を忘れて、その世界に引き込まれてしまうのです。

◆子どもと世界との出会い

井出先生の文章を読んだ後に、目に浮かんできたもう一つの情景がありました。それは、けろちゃんごとおべえさんの姿に、我を忘れて引き込まれている子どもの情景です。そんな描写は井出先生の文章のどこにもないのですが、目に浮かんでくるのです。なぜか。それは、この「引き込まれ、飲み込まれ、入り込んでしまう体験」がないと、「書き込み、つくり込む時の執念」が生まれてこないのだと思うからです。

奥行きのある世界に引き込まれ、飲み込まれ、入り込んでしまった時、人は世界の「生命力」に触れる。

と同時に、世界の「奥行き」を垣間見る。そうして、世界から「生命力」を分けていただき、その「生命力」に生かされることで、垣間見た「奥行き」を何とか表現しようとする。何とか表現しようとして書き込み、つくり込む。子どもとけろちゃんとの「出会い」の中で起きていたことは、このような「引き込まれる体験」と「つくり込む執念」の連動ではないでしょうか。

◆生命のリズムに沿って

「引き込まれる体験」も「つくり込む執念」も、相当な体力を必要とします。「引き込まれる体験」は「生命」に触れる体験だと書きましたが、語源的には「触れる」という言葉は、見てはいけないものを見ちゃうこと、触れてはいけないものに触れてしまうことを含意しています。今でも法を犯すことを「法に触れる」といいますが、その時の「触れる」です。つまり、あまり頻繁に見てしまうと自分を保てなくなるような類のもの（しかし、タブーを犯してでも、もう一度見てみたくなるような魅力をもつもの）を目にする時の体験が「触れる」なのです。

「込む」のほうは、「触れる」以上に、体力を必要とします。「込む」は語源的には「籠（こも）る」と同語源です。といわれても、「籠る」が体力を必要とするというイメージは湧きづらいかもしれません。しかし、「籠る」のもともとの意味は、山に「籠り」、寺に「籠る」時の「籠る」です。それは、単なる「隠れる」とは異なります。「籠る」ことで新しい自分へと生まれ変わり、困難な状況からの復活をもたらすことができると考えられてきました。子どもが「遊び込んで」いる時、つまり「遊び」に「籠って」いる時、彼は新しい自分へと生まれ変わろうとしている。それぐらいの一大事なのです。そこに執念を感じるのは当然なのかもしれません。

ともあれ、「引き込まれる体験」も「つくり込む執念」も、「触れる」も「籠る」も相当な体力を必要としますから、籠った後には「くつろぐ」ことも肝心です。ちなみに「くつろぐ」は「朽ちる」「崩れる」と同語源で、高ぶりながら構築されたものが落ちたり、雨風にさらされたりしながら、以前の状態へと戻っていく様子を指した言葉です。

「籠る」と「くつろぐ」は生活にリズムを与えてくれます。つまり、「籠って」は、疲れて「くつろぐ」。「く

つろいで」たはずが、いつの間にか「籠って」しまっている。そのようなリズムに沿って生活する中で、子どもたちは世界から「生命力」を分けていただき、新しい自分へと生まれ変わっていく。本来なら、この「生まれ変わり」の中身をしっかりと述べなくてはならないのですが、別の機会に述べることにします（この「生まれ変わり」は、「世界の意味を再発見すること」と深くかかわっています）。

とはいえ、「人為」と「自然」の二分法に則れば、この「生まれ変わり」が生命のリズムに沿う「自然」なものであり、それゆえに私たち大人が「人為」的に計画してしまいがちな「意図的で計画的な教育」よりも、場合によっては信頼できるものであることは、最後に指摘しておきます。

(久保健太●篠原保育医療情報専門学校こども保育学科学科長)

編集後記

◎「語り」を越えた「感じ取り」

今回は、「事例とその振り返り」を受けて「論評」するリレー形式を採りました。

「けろちゃんおみこし」は他園でも見られる実践だと思えます。しかし、ここでは、子どもの凄さ、素晴らしさを語っていることに違いはないとしても、子どもたちが「奥行きのある世界」へ「引き込まれ、飲み込まれ、入り込んでしまう体験」（久保委員）をしている、そう感じ取る井出委員の洞察の仕方が「美しい」。その「美しさ」を多彩な角度から論及される久保委員の奥行きの高さに対しても、ある種の美しさを感じます。

こんなふうに子どもの姿を本来のアートの心で感じ取るマインド。今後期待される保育者の姿であってほしい、と思います。

(片山喜章●神戸市・はっと保育園園長)

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp